マットゥール村訪問記
―― 現代サンスクリット事情の一端 ――

沼　田　一　郎

1．旅行の概要

2008年度，共生思想研究センターの客員研究員として東洋大学に約１ヶ月間滞在されたRamesh Kumar Pandey氏（Shri Lal Bahadur Rashtriya Sanskrit Vidya Peeth）より，今日なお日常生活において人々がサンスクリットを使用する村がインドに存在する，というお話を伺った。それがカルナータカ州の「マットゥール（Matturu，Matturあるいは Mathoorと表記されることもある。以下M)」という村であることがわかったが，詳細な情報を得ることはできず，ウェブ上に簡潔な訪問記録（http://www.koredeindia.com/005-10.htm#1007）と新聞の特集記事（http://timesofindia.indiatimes.com/articleshow/msid-1199965,curpg-1.cms）を見いだしたに過ぎなかった。それが昨年（2009年）の９月に実際にそのM村を訪れる機会を得て，短期間ではあったが実状を見聞してきたので，ここにそれを紹介する次第である。(筆者は文献研究を通じてインドに興味を持ったのであって，文化人類学の分野で行われるようなフィールドワークの経験はない。本稿はそのような者が現地で知り得たことを紹介することを目的としているのであり，「調査報告」と称することはできないであろう。「訪問記」と題した所以である)

今回の旅行の日程は以下の通りである。

９月16日：関西空港→ムンバイ
９月17日：ムンバイ→マンガロール→シモガ
９月18日～９月28日：シモガ滞在
９月28日：シモガ→シュリンゲーリ→マンガロール
９月29日：マンガロール→ニューデリー→関西空港
９月30日：帰国

M 村における宿泊施設の有無については事前に確認することができなかったが，シモガ市から数 km のところにあるらしいということがわかっていたので，同市に滞在して連日通うことにした。

2．シモガから M 村への道程

シモガ市はカルナータカ州シモガ県シモガ郡の中心都市であり，都市部の人口は274,102人である（2001年センサス。シモガ市の公式ウェブサイト http://www.shimogacity.gov.in/index.html より）。州都であるバンガロールからは約270km の距離にあり，バス路線で結ばれている。筆者はマンガロールから自動車を使ったが，所要時間は 5 時間弱であった。

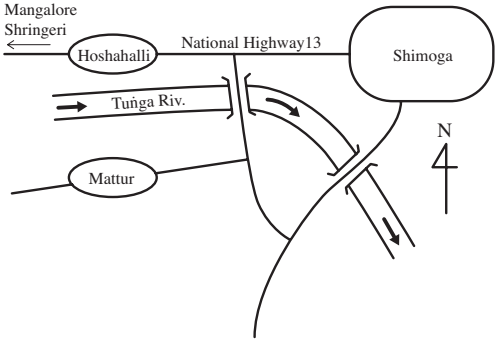

図 1

シモガから M 村までは自転車で往復する予定であったが，各種の地図に M という地名はなく，正確な位置がわからなかった。シモガからどのくらいの距離なのか，街頭で幾人かに質問してみたが，答えは 5 km から15km まで様々であった。仮に15km だとすると，自転車で連日通うのは難しい。しかしシモガから路線バスが運行されていることが判明したので，道路事情を探るためにもとりあえずバスで行ってみることにした。

M まであと 2 km

シモガ市内の集配郵便局がある交差点から，徒歩で15分ほどのところにバスターミナルがあり，M 村行きのバスは 1 時間に 1 本程度の頻度で発車する。午前11時発のバスに乗ると，ちょ

うど学校の下校時間と重なったためか車内は混雑している。後ろの座席の中学生くらいの女の子たちがこちらを見ながらヒソヒソ話していたが，ついに「お話し（dialogue）しましょう」と話しかけてきた。学校で習っている英語を使って外国人と会話してみたかったというところであろうか。中学 2 年生の彼女らはサンスクリットを習ったことはあるが，会話はできないということである。M 村のことは知っており，隣席の女性は自分も M へ行くところだと言っていた。

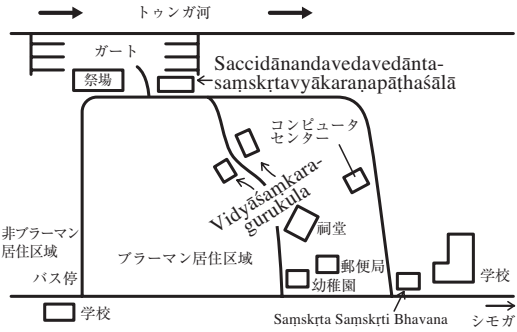

図 2

ターミナル出発後15分くらいでトゥンガ（Tuṅga）河にかかる橋（鉄道線路も平行している）を渡る。それから右折と左折を一度ずつした後は道幅が狭くなり，水田とヤシやバナナの林の中を進むようになる。途中ムスリムの居住地域（パキスタンの国旗が掲げられている）を通過して，故障による停車を除くと約30分で M 村に到着した。帰路は別のコースを走り，所要時間はやや短かった。この翌日からは自転車で通ったが，この場合の所要時間は約 1 時間であった。

3．M 村の概要

図 1 に示したように，トゥンガ河の左岸には国道13号（National Highway13）が走っており，マンガロールやシュリンゲーリなどとシモガを結んでいる。この国道沿いには M と同様に skt village として知られるホシャハリ（Hoshahalli。以下 H）村がある。M 村の対岸付近に位置しており，トゥンガ河の水位が下がると両村の間は飛び石伝いに歩いて渉れるのだという。H 村はシモガ市内で購入したカルナータカ州の道路地図に掲載されいているが，上述のように M 村の名前はない。

M はトゥンガ河右岸のバス道路に沿った東西 1 km 程度の規模の村で

ブラーマンの居住区域

ある。図 2 に示したとおり，この道路は河畔から100m ほどしか離れておらず，また反対側にはヤシの林が広がっているから，村の居住区域は道路を中心とした細長いものであると思われる。

村は二つの区域に分かれ，東側はブラーマンの居住区域であり，西側には非ブラーマンが主として居住している。ブラーマン区域の街路はレンガあるいはタイルで舗装されているし，一軒一軒の家屋の規模も大きく，自動車やオートバイの保有率も高く見受けられた。

村全体の人口は不明であるが，複数の住民によるとブラーマン，非ブラーマンとも数百人規模の人口を有しているらしく，千人から千数百人というところであろうと思われる。

M の歴史と伝説

M の歴史については上記の新聞記事に若干紹介されているが，現地にはひとつの伝説が伝えられている。複数のブラーマンから聞いた共通部分の梗概は以下のようなものである。

> 数百年の昔，Rāmarāja という名の王がいた。彼は信仰篤く，ある村のブラーマン達に多大の布施をしたのであった。王の布施が余りに多額であったため王家は没落してしまったが，ブラーマン達は繁栄した。ブラーマン達は二つの家系に属しており，いずれも黒ヤジュルヴェーダのタイッティリーヤ派に属する家系であった。両家系のブラーマンたちは，ヴェーダを 1 センテンスごとに交互に唱えたという。やがてブラーマン達は村に住む他の人々にも skt を教えるようになり，今日のM村の原型ができあがったのであった。かつては40家族であったブラーマン達は今日では120～125家族になっている。

信仰

村にはブラーマン居住区域とそれ以外の区域のそれぞれに寺院がある。

ブラーマンたちはシヴァ教徒の印を額に付けているが，ヴィシュヌ神も同様に信仰されており，‘śivasya hṛdayaṃ viṣṇuḥ, viṣṇoḥ hṛdayaṃ śivaḥ, eko devaḥ’と言われている。ブラーマン居住区域にはその他に祠堂があり，そこでは毎日午前11：30頃からDurgāpūjā が行われている。

プージャーに集まった人々

4．M における skt の実状

結論から述べるならば，M 村では skt が日常言語として使用されているのではない。筆者が最も頻繁に接したのは10代の若いブラーマンたちであり，彼らを含むブラーマンとは skt あるいは英語で会話することが可能である。非ブラーマンの住民でも簡単な会話を skt で行うことができるし，学校でも skt を教育しているようであり，非ブラーマン居住区域で子供たちが，‘bhavataḥ nāma kim?’（お名前は？）と尋ねてくることもあった。

村の子供たち

筆者が skt の知識を持つことがわかるようになると，ブラーマンの住民たちは‘bhavataḥ viśeṣaḥ asti?’（お変わりないですか？），‘bhojanaṃ samāptam?’（食事は済みましたか？）などと話しかけるようになった。

彼らとの会話の中で気付いたのは「連声（sandhi）」の規則が厳密に守られていないということである。例えば，‘devo ’sti’となるべき場合でも‘devaḥ asti’という。これは文法学の高度な知識を持つ人物（後述の Sanatkumāra 氏など）でも同様であった。また動詞の過去能動分詞形が用いられることが多い。例えば「私は日本から来た」は‘ahaṃ

jāpānād āgataḥ’ ではなく，‘ahaṃ jāpānād āgatavān’ というのである。

Vidyāśaṃkaragurukula の生徒たち

伝統的な教育

M 村には通常の学校以外に，ブラーマンを対象とする skt 教育機関がある。それは，Vidyāśaṃkaragurukula と，Saccidānandavedavedānatasaṃskṛtavyākaraṇapāṭhaśālā Mattūru とである。前者では Sanatkumāra 氏が，後者では Keśavādhānin 氏が師匠とされており，前者は主として幼年期のブラーマンにヴェーダないしは skt を教育することを旨としている。

トゥンガ河のガートで

初日の訪問以来，筆者はトゥンガ河のガートで後者に所属する若いブラーマンたちと接触する機会が多かった。彼らによると，ブラーマンの子弟は遅くとも16歳までに入門してヴェーダの学習を始める。幼時ならば「体で憶える」ことができるが，16歳を過ぎてしまうと学習の効率が悪くなるからである。学習には午前中 4 時間，午後 2 時間，夜間 2 時間の合計 8 時間が充てられ，その内容は言うまでもなく専らテキストの暗唱である。

ところで，彼らの skt 理解はどのようなものであろうか。筆者との会話は skt で行うことができるが，彼らに「ヴェーダのテキストの意味は理解しているのか」と質問したところ，「少しだけだ（kiṃ cit）」ということであった。また，筆者が『リグ・ヴェーダ』の Puruṣasūkta 冒頭の一節を唱えたのを聴いて，「それは『ヤジュル・ヴェーダ』だ」と主張して譲らなかった。年齢が進んで学習が深まると変わるのかも知れないが，彼らの段階ではヴェーダそのものについては十分な理解が得られていないようである。

ヴェーダの伝承

M村のブラーマンたちは黒ヤジュルヴェーダ・タイッティリーヤ派の伝統に属することを自認している。実際少年達は常に『タイッティリーヤ・サンヒター』のカンナダ文字刊本を持ってトゥンガ河のガートで学習に努めており，サンヒター，ブラーフマナ，アーラニヤカと順次読み進めていくのだという。しかし，他のテキストも学習対象であり，ある時は『バガバッド・ギーター』を暗唱中であった。

『ギーター』暗唱中

彼ら自身がタイッティリーヤ派の伝統に生きていると言うからには，現代の刊本による学習をするだけとは思えない。そこで彼らの師匠である Keśavādhānin 氏に「手書き写本はないのか」と訊ねたところ，彼の言うには「すべての写本はマイソールの Viśiṣṭādvaita 研究所に収納されているので，村には全くない」のである。しかし，その数日前，トゥンガ河のガートで少年ブラーマンたちに同じ質問をしたところ，いとも簡単に数葉の貝葉写本を持ち出してきたのである。(筆者にとっては文字の解読自体が困難であり内容は今のところ不明であるし，K 師の許可を得ていないので，写本そのものの公表は控える。) したがって，写本が存在すること自体はわかっていたのであるが，コレクションの状況を正確に知りたくて K 氏にそのような質問をしたのである。写本の貴重さを理解しない少年たちと，それを隠そうとする師匠との態度の違いが興味深い。

skt の文章論を説明する Keśavādhānin 氏

パンディットたち

ある土曜日の昼近く，上述の祠堂でプージャーを見学していると，ひとりのブラーマンが「skt を学びに来たのか？　それなら良い人物に合わせてやろう」と話しかけてきた。彼の名は Nārāyaṇasvāmin，平日はシモガ市の telephone division に勤務しているという。彼の言うには，M 村のブラーマンたちは会社員，教師，公務員，農業（！）など，様々な職業に就いていて，「バランスがとれている」のである。

そうして案内されたのが上述の Sanatkumnāra 氏のお宅であった。まずお茶をごちそうになり，椅子に腰掛けて待っていると，S 氏が現れた。そして N 氏と筆者のことについて skt で話し合っている。「彼は日本から来て，シモガのジュエルロックホテルに泊まっている。今日はサンスクリットを学びに村へ来たのだ。彼を喜ばせるために，明日ホテルに行ってやってくれないか」というようなことを N 氏が話しているのを S 氏は頷きながら聞いていた。しばらくして，S 氏が筆者に向かって「明日の夜，仕事の帰りにホテルに行って skt について教えてやろう。7 時半以降に行くから，そちらの準備ができたら携帯に電話するように」と言われた（これは英語で）。

Sanatkumāra 氏と

翌日の夜，S 氏は筆者の泊まっているホテルに来訪された。シモガ市の Bhāratīya Vidyā Bhavan で子供達に skt を教えておられるのだそうである。1 時間弱の間 Pāṇini 文法学の概略，特に動詞語根からの語形成（kṛt 接尾辞の問題など）について話してくださった。skt の発音は明瞭であり，いわゆる「ローマ字読み」になれている筆者には理解しやすかった。S氏には Dharmaśāstra についての700ページに及ぶ未刊の著作があるが，カンナダ語で書かれているので筆者には読めないことを残念がっておられ，また *Manusmṛti* の諸注釈の中では Medhātithi の *Manubhāṣya* が大変すばらしいということを強調しておられた。

さて，次いでN氏はもう一人のパンディットに会わせてくれた。彼はPāṇini 文法にも造詣が深いようであったが，「sktを学ぶなら，とにかくsktで話すようにつとめるべきだ。文法はもちろん重要だが，sktにも一つの言語として「流れ」というものがあるのだから，常に新しいことばが生まれている。古い文法にばかりこだわるべきではない」という見解を披瀝したのであった。彼にとってはsktはいまだに生きた言語なのであろう。

M村のブラーマン居住区をひととおり案内してくれた後，N氏は先の祠堂のところで別れる際に「村の人々にあなたのことを話しておくから，sktを学びに来るといい」と言ってくれたのである。その後村のブラーマンたちが筆者にsktで話しかけてくれるようになったのは既述の通りである。

外国人 skt 学習者

翌日村の学校を外から眺めていると，英語担当の教師が「どうぞ入って見学してください」と招き入れて案内してくれた。創立は1960年，小・中学校が一緒になっているようであり，教師数は20人，生徒数は400人であるという。テスト期間中であり，あるクラスでは顔見知りの少年ブラーマンが「図工」のテストとして絵を描いているところであった。その後校内の諸設備（コンピュータ室や給食室など）を見学して，併設されている“Saṃskṛta Saṃskṛti Bhavanam”で一人のインド系ニュージーランド人Prayāga氏に紹介された。ここは写真のとおりskt学習者のための施設であり，長期に滞在することもできるのである。

Bhavanam の来歴

彼は，グジャラート出身の夫人と3人の子供たちを伴って3ヶ月間ほどMに滞在する予定である。簡単なskt会話はできるが，正確な文法的知識は欠いている。先生（Lukmiṇī氏）に来てもらってほぼ毎日sktを習っているが，名詞や代名詞の格変化あるいは数の区別についても理

解するのが難しそうであった。

5．Hoshahalli 村について

ホシャハリ（H）村は上述のようにトゥンガ河の左岸を走る国道沿いにあり（図１），M 村に通うついでに幾度か訪ねてみた。M 村の地図上の位置が正確にわからないので，両者の位置関係は不明である。H 村のガートからは渡し船が運航されていたが，直接 M 村のガートへ連絡しているのではない。村の規模としては M より大きく，ブラーマンの居住区域が独立している点は同じである。

渡し船

ある日彼らの祭場でプージャーを見学する機会を得た。筆者は祭場に立ち入ることは許されなかったが，それは服装の問題であるということであった。skt でマントラ（「…へ（dat.）svāhā」）を唱えつつ火に供物や薪を投入していたが，その他はプラーナからの文言である。

ここには若いブラーマンたちの学校（Śrīgāyatrīvedapāṭhaśāla）もあり，「図書室」を見せてもらったが，そこには限られた数の書籍があるのみであった。M 村のブラーマンたちと同様，タイッティリーヤ派に属していると自認している。彼らとは skt および英語で会話できるが，彼ら自身はサンケーティ（Sanketi あるいは Sankethi）語を使っており，会話を聞かせてくれた。この言語については，『言語学大辞典』（三省堂）にも記事がないが，K. S. Nagaraja ‘Cultural Vocabulary of Sanketi’

執行中のプージャーと供物（右下）

（『アジアアフリカ言語文化研究所通信』vol.94，1988，pp.69-71）を参照。

6．おわりに

あるインド人学者に「近々カルナータカのマットゥールに行くのだ」と話したところ，「あなたをがっかりさせてしまうかも知れない」と言われたことがあった。確かに skt village とはいっても，学術的に高度な議論が日常的になされているわけではなく，古典研究者としては関心を惹かれるところではないかも知れないが，フィールド資料としては興味深いものと言えるだろう。今回の訪問はごく限られた期間であったし，筆者自身の能力の問題もあり，skt の現状についても表面的な理解に終わった。両村のヴェーダ伝承の実態や内部の社会構造などについては後日を期したいと思う。